The Adventures of SONIC the Hedgehog

大人気！ ゲーム読み物

ソニックの大冒険

作／寺田憲史　絵／おちよしひこ　©1991 SEGA

バンバンバンバン！

エッグマン特製のバスケット・ボール、そのすごいことすごいこと。

それは、まるで生き物のように、ニッキの手のひらと地面とをものすごいスピードで行ったり来たり。

そして、コート中、ニッキをぐいぐい引っ張るように走らせたのでした。

「すっごぉ～い、ニッキ～！」

「やだ、ニッキって、こんなにバスケット上手だったの～！」

応援のエミーたちが、歓声をあげます。じつは、エミー、

「よし、ベルーカ・ブラザースとは、バスケットで決着つけるぞ。」

ってニッキが言い出した時、

「だいじょうぶかなぁ？」

と思っていたのでした。それが、このニッキの大かつやく！（まだ点数を入れたワケで

これまでのお話▼ニッキは、心やさしく、おとなしい男の子。ある日、ひょんなことから、いたずら者のベルーカ兄弟とバスケットの試合をすることになりました。ところが、〝ソニック・パワー〟を研究しているナゾの天才科学者ドクター・エッグマンが、ニッキに特製のボールを持たせたために……

はないけれど。)

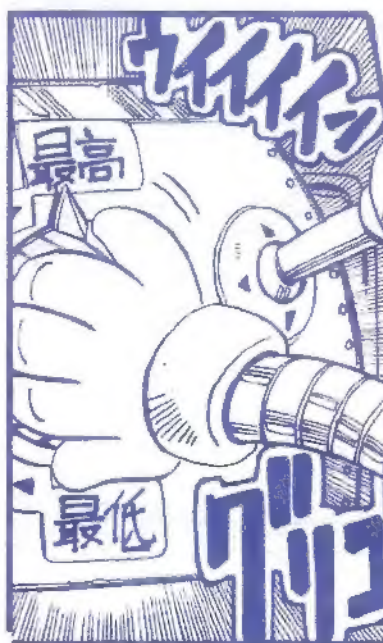
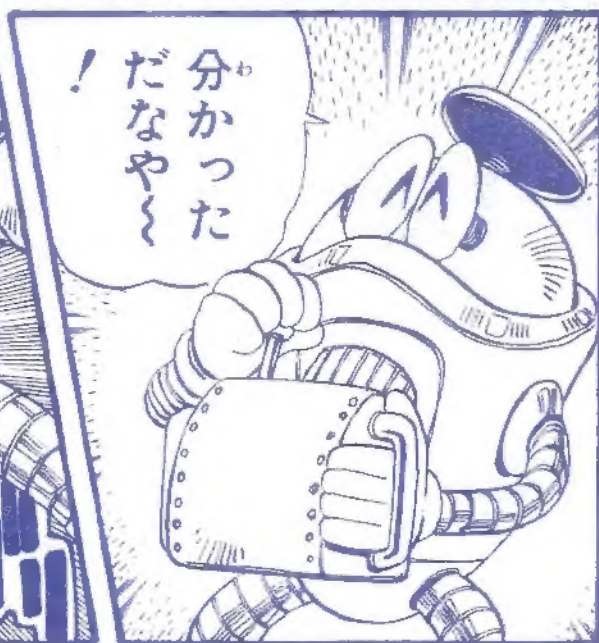
「そ〜れ、ニッキ、その調子よ〜!」

エミーたちの応援も、たちまち活気づいてきました。

さて、バスケット・コートの外では、ニッキに特製のボールを持たせた張本人、ドクター・エッグマンとオムレッツが見ています。

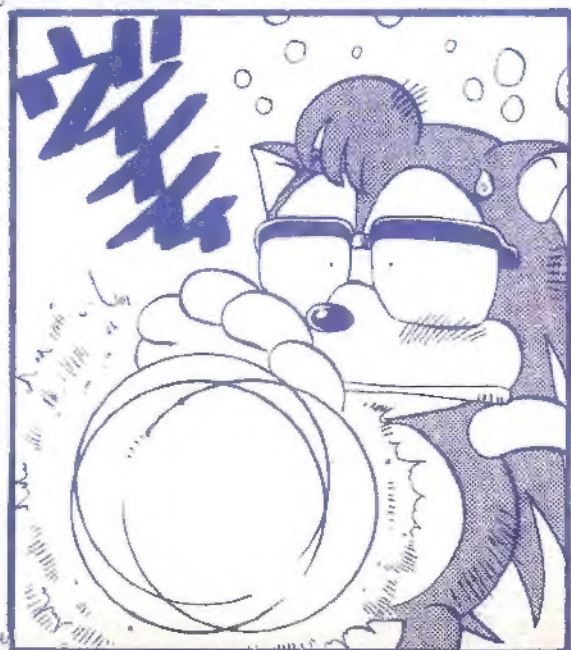
そして、コートを走り回るニッキにオムレッツは大喜びです。

「だはっなはっなっは……! ドクター、こりゃあニッキのチームの勝ちだなや。」

ズン! エッグマンが、オムレッツのおしりをドつきます。

「このバ〜タレが! バスケの試合など、ワシャど〜でもいいんじゃい! いいか、どこであの小僧がソニック・パワーをさくれつさせるか、それを見きわめるのが、このバスケット・ボール作戦のねらいじゃい。」

「だなや〜。」

ピピピッ!

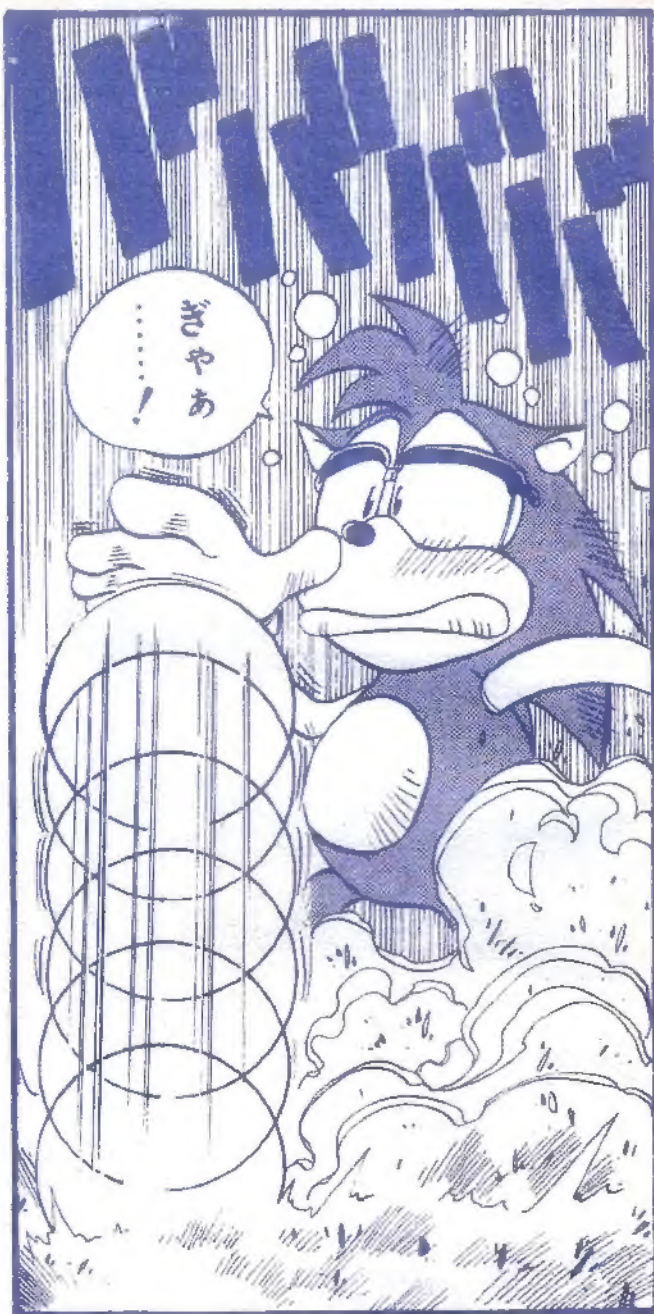
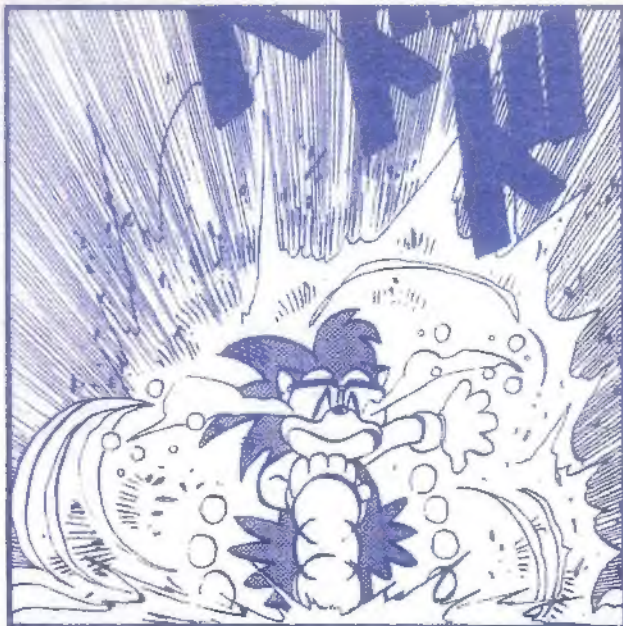
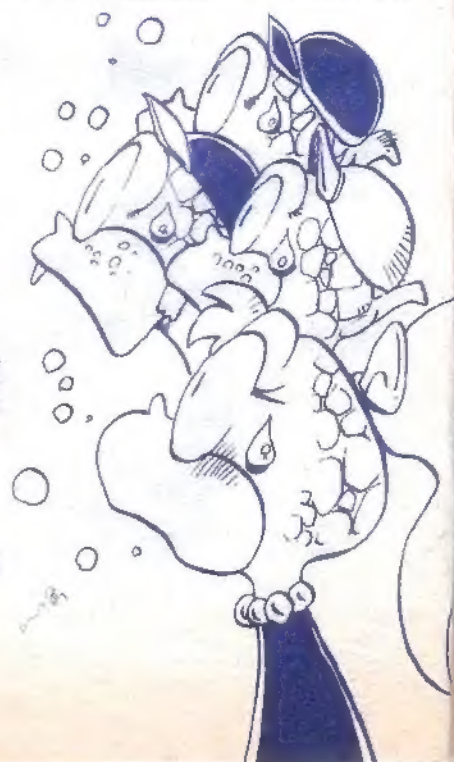
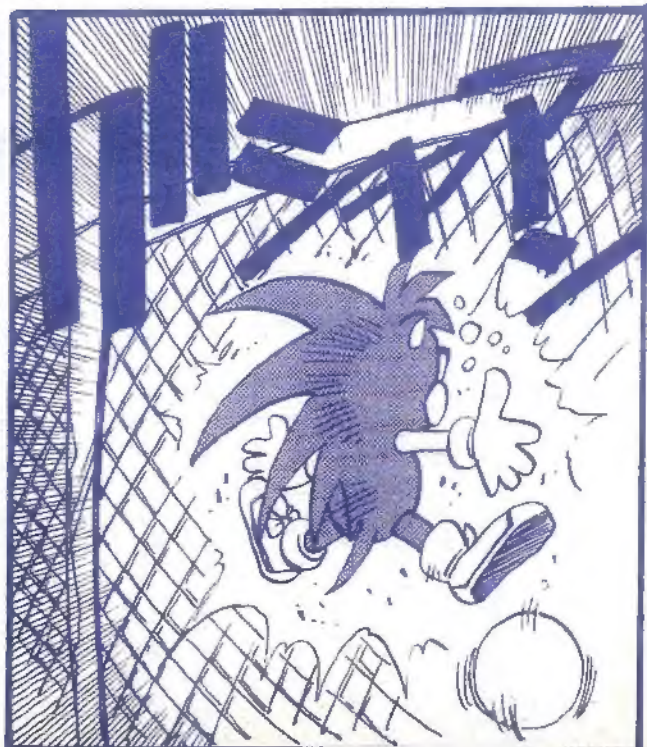
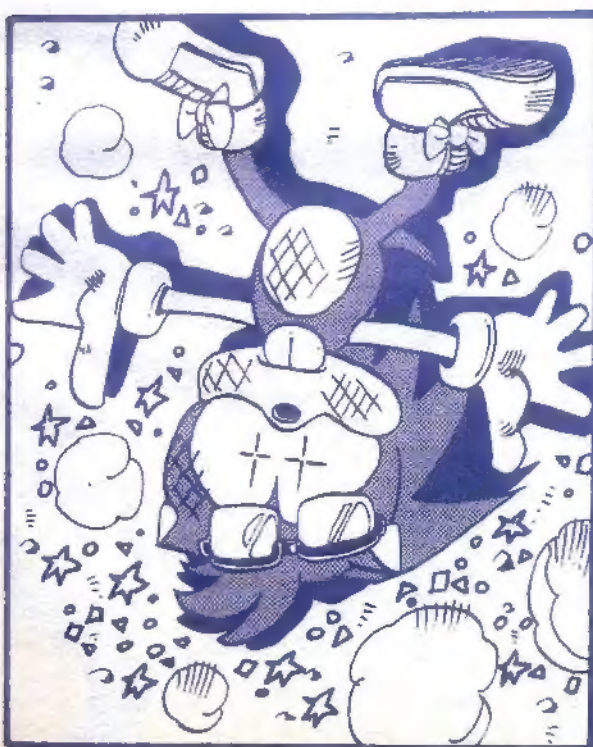
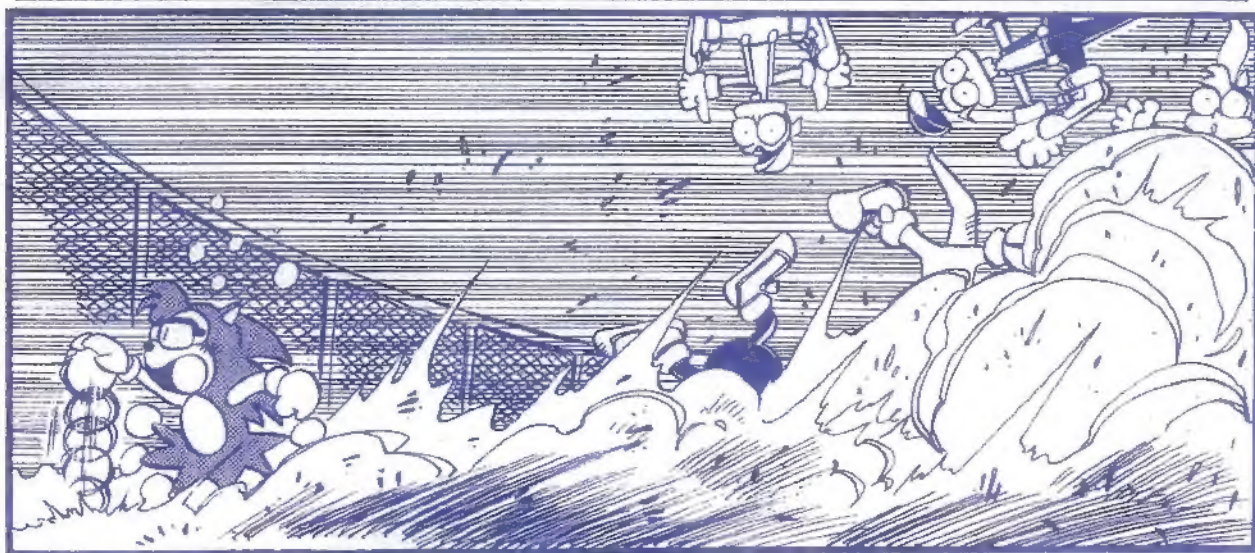
エッグマンが、〈エネルギー見っけたメカ〉

をそうさして、アンテナをニッキのほうに向けます。

このメカは、ソニック・パワーにびん感に反応するといわれています。たしかに、タコ形潜水かんの中の時のように、ニッキからはわずかにソニック・パワーの反応がありますが、でもまだまだ十分ではありません。

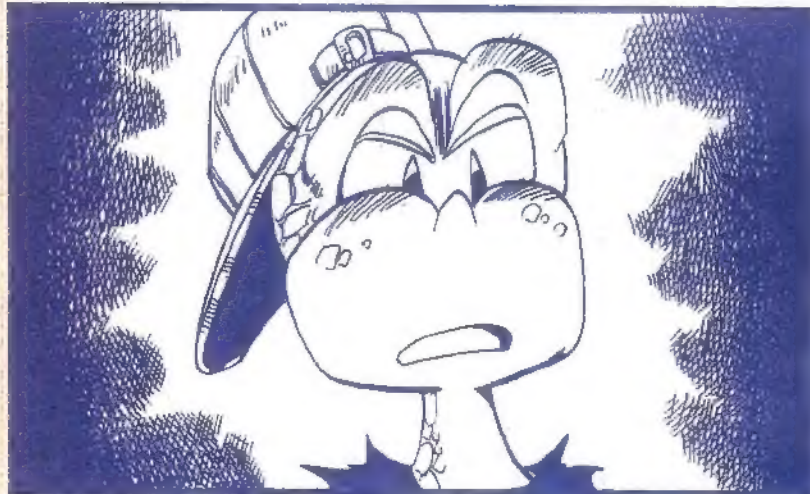
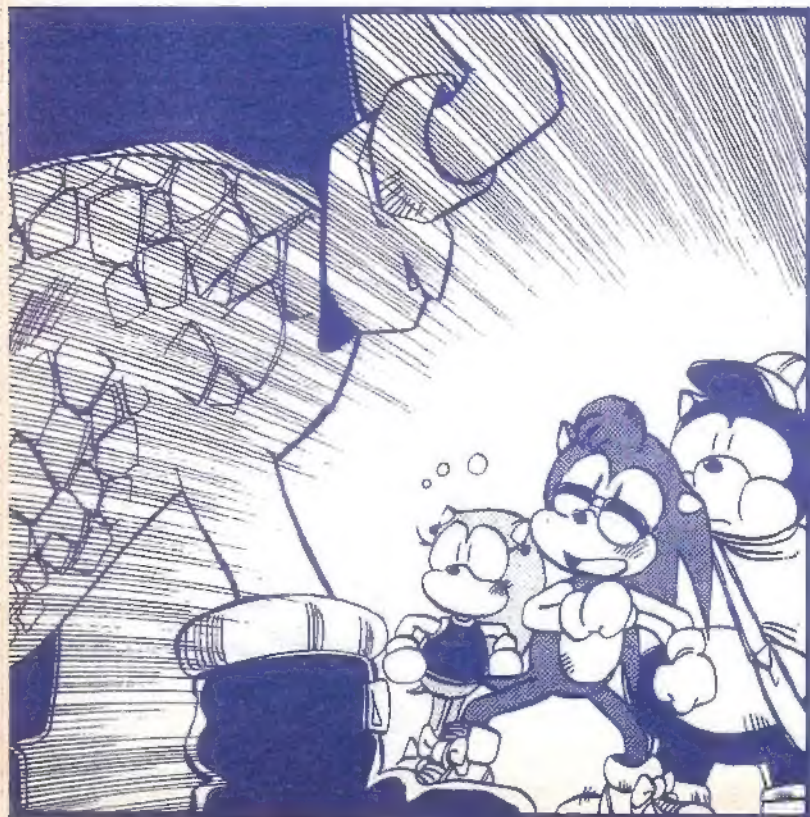
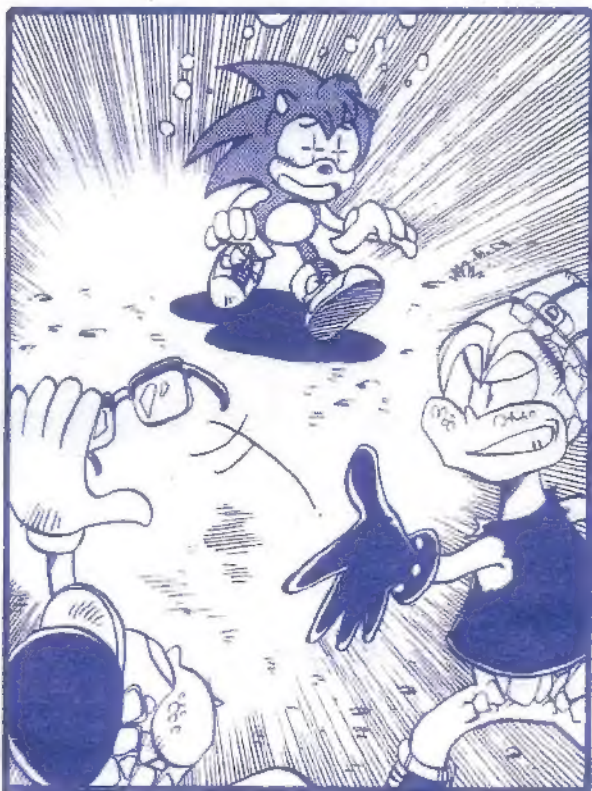
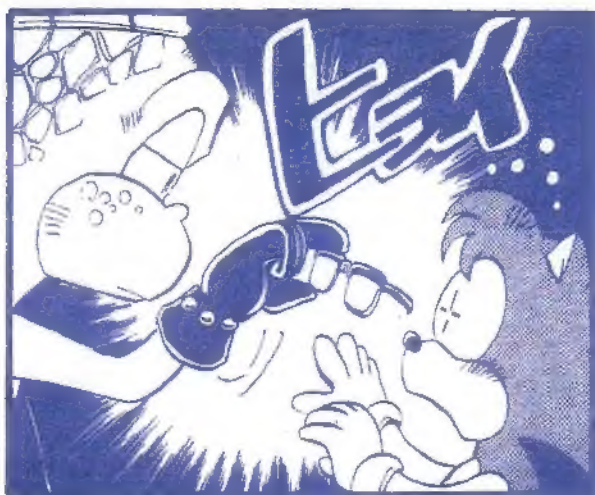
メカのアンテナが、ピッコンピッコン!と右に左に動き回るほどでなければ本当のソニック・パワーとは言えないのです。

「むむむ・・・、それ早よ、正体を現さんかソニック・ザ・ヘッジホッグ!」

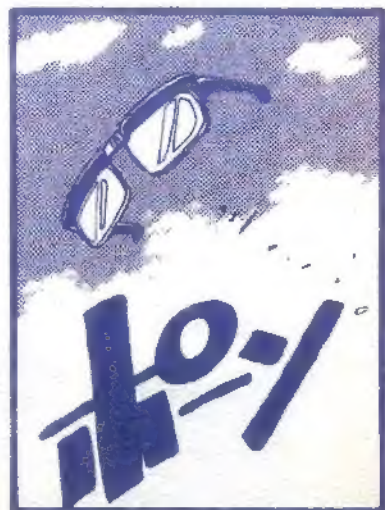
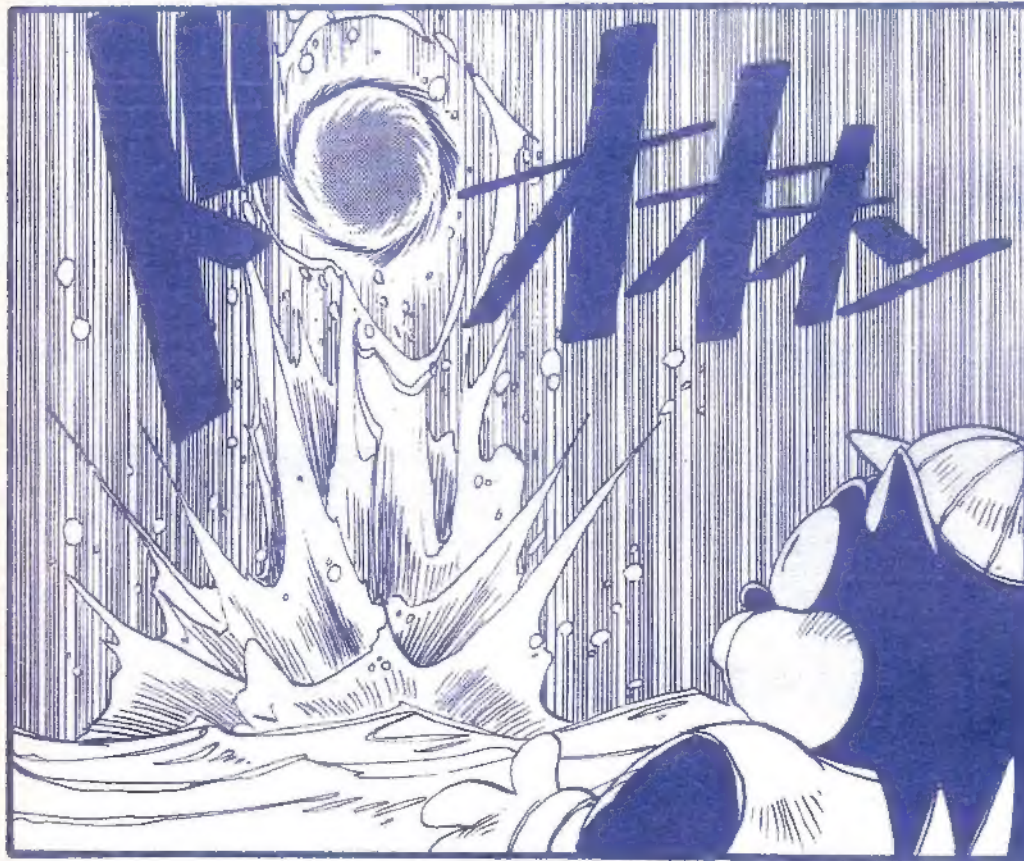
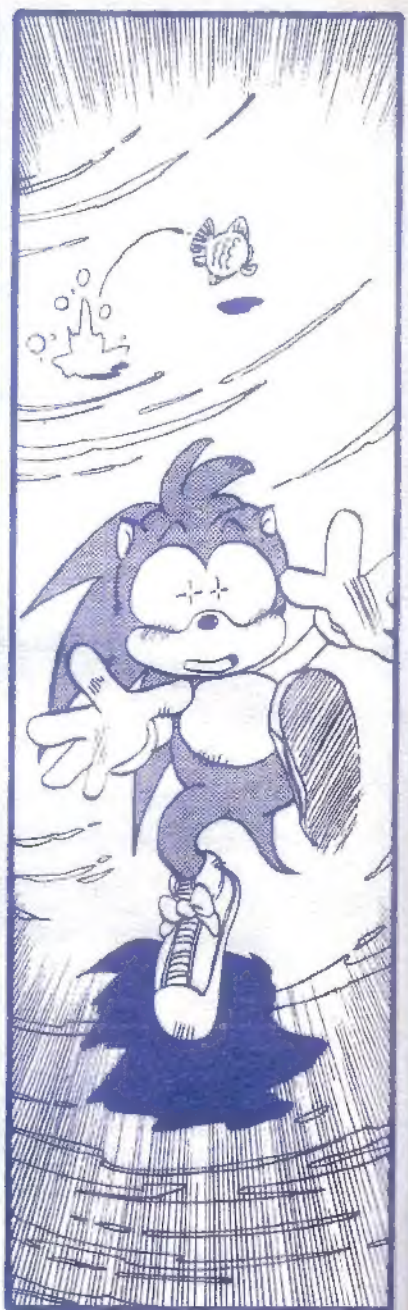
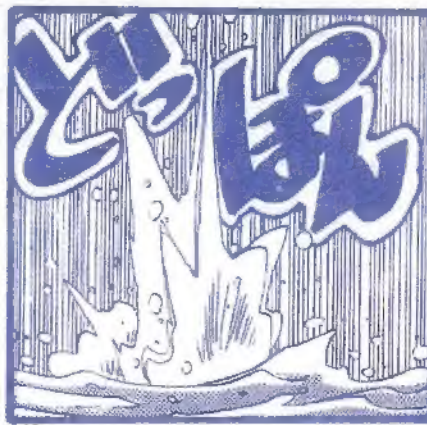
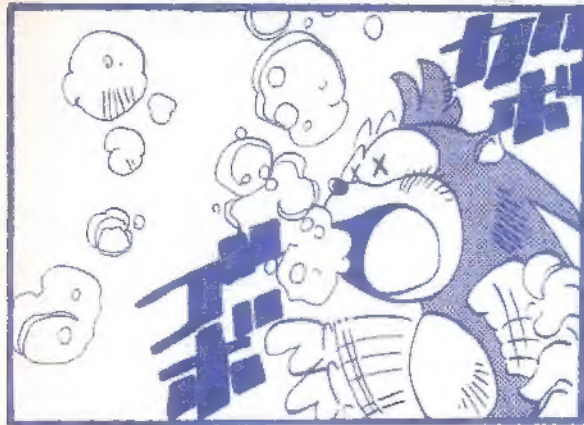
「しかし、ホントにあのニッキって子がソニックなんだりあ?」

「なんど言ったら分かるんじゃい! このワ

シの計算にマチガイないわい!」
「だなやだなやぁ~、なはははは~。」
「それ、オムレッツよ! 特製バスケット・ボールのパワーアップじゃ。」
「分かっただなや~!」
じつは、ニッキの手に張りついているようなボールは、オムレッツが無線でそうさしていたもの。
クイ~ン! オムレッツは、一気に最高のパワーに切りかえました。
「ぎゃぁぁぁ~~~~!」
それで悲鳴をあげたのは、ニッキです。
ボールは、前よりもいっそうはげしくドリブルするようになり、同時にさらに速いスピードでニッキのことを走らせたのでした。
「ぴえ~~~! なんだなんだ~?」
「こいつぅ~、走り回ってるだけで、ちっともシュートしね~じゃんかぁ!」
敵チームのベルーカ・ブラザースも、これにはビックリ!
しかも、ドッカァ~ンボッカァ~ン! ニッキのすさまじいパワーに、次つぎとはじき飛ばされていったのでした。
四つ子の兄弟の中では、紅一点。ミグ~・ベルーカが、プンプンに怒って言いました。
「なによ~、ズルイじゃないの~。ニッキったら、バスケットで決着つけるなんていっておいて。これじゃまるっきりケンカと同じじゃないの。」
「おう、そうだそうだ!」
兄弟のトッド、ハッド、マッドも、いっせ

いにさわぎだします。そして、
「お～し、そんじゃぁこっちも。……ケンカだぁ～い！」
ひとかたまりになって、ニッキにトツゲキ開始です。
「あ～ん、お兄ィちゃん！ ヤバイよ～！」
同じチームのタニアが叫びます。タニアだけではありません。チームメイトたちが、ぼう走するニッキを止めようと走り出しました。
と・こ・ろ・が！
「わ～～～！ やめろやめろ～～～！ ボクに近づくなぁ～～～！」
なにしろ、ニッキにしたって自分でぼう走を止められないのです。
よってくるチームメイト、さらに、トツゲキしてきたベルーカ・ブラザースを次つぎにはじき飛ばしてしまったのでした。
「ぐはぐはっ！ さぁ、いよいよだぞ！ それ！ 小僧、正体を見せろ！ ソニック・ザ・ヘッジホッグとなるのだぁ！」
ドクター・エッグマンは、コウフンのあまりコートをおおうネットによじ登りだしました。
「ドクター、落ちつくだりあ～。」
しかし、ついにニッキはソニックにヘンシンするなんてことはなく、さんざんあばれ回ったあげく、ドドーン！

なんと、ヒサンなことに、ネットにげきとつしてしまったのでした。
「ニッキ〜〜！」
エミーたちが、ニッキにかけよった時、
「フギャア〜〜〜〜！」
ニッキはカンペキ気を失っていたのでした。
「あん？」
さすがに、ドクター・エッグマンもガッカリです。でもこの時、カレは、まだ気づいていなかったのです。
そう……。
ソニック・ザ・ヘッジホッグが現れる時っていうのは、悪いヤツに町の平和が乱される時。
つまり、ソニックは、正義のためにだけ現れるのです。
ところが、ところが！このバスケットさわぎのおかげで、その正義のスーパースター、ソニックがすぐに登場することになったのでした。

出た！伝説の光のカタマリ!!

「おい、お前が、ニッキだな。」
次の日。
学校からの帰り道、こう言ってニッキたちの前に現れたのは、アントン・ベルーカでした。
四つ子のベルーカ・ブラザースのお兄ちゃんで。ダウンタウンでは知らないものがいないくらいのワルです。もちろん、マッド、ハッド、トッド、それにミグ〜もいっしょです。
「あわわ〜〜〜〜！」

ニッキは、顔を引きつらせました。
それは、いっしょにいたとなりに住むリトル・ジョン、それに妹のタニアも同じです。いつもひっきりなしに何か食べているリトル・ジョンなど、大あわてで持っていたポテトチップを後ろにかくしました。
「こいつ、……弟たちをさんざん痛めつけてくれたそうだなぁ〜〜。」
アントンは、そう言ってニッキをにらみつけました。
「あっ、いや。あれはですねぇ。ボールがかってに動き回って……。」

ニッキはすぐに理由を説明しようとしましたが、でもどう考えたって、それをこのアントンが信じてくれるワケがありません。
　アントンは、ニッキの言うことなどまるで聞かずに、大きな指をニッキの顔まで伸ばしました。
　そして、ヒョイ！とメガネをはずしたのです。
　ニッキは、とってもすごい近眼です。
　メガネを取られたのでは、ほとんどといっていいほどよく目が見えません。目の前のアントンでさえ、ボワ～ンとくもりガラスの向こうにいるヒトのように見えるだけです。

　さぁそれからが、もう大変。
「あ～ん、メガネ返してよ～！」
　ニッキがこう言っても、ぜんぜんダメです。
「イエ～イ、こっちだぜぇ～だぁ！」
「フ～ンだ、こっちだよぉ～だ！」
と、四つ子が次つぎにメガネを投げあったのです。そのたびに、ニッキはあっちへウロウロこっちへウロウロ……。
「んもう～、あんたたち何すんのよ～～～！」
　怒ったタニアは、四つ子に向かってつかみかかりました。

「こりゃぁいいや。よーし、ニッキといっしょに妹にもオシオキしてやるかぁ～！」
　アントンが、そう言ってタニアをつかみあげます。
「キャア～～～！」
「や、やめろ！　妹に手を出すな！」
　ニッキは、手探りしながらも、なんとかタニアを助けようと向かっていきました。でも、
「ええ～い！　うっさいんだよ～！」
　マッドにドン！とけ飛ばされて、なんと池の中に落ちてしまったのでした。
　ブクブクブク……。
　ニッキは、水が苦手です。泳げないのです。
ニッキは、水の中で必死にもがきながら、妹の助けを呼ぶ声を聞きました。
「ま、待ってろ！
　今、助けてやるからな！」
　でも、そうは思っても体は池の底に落ちて

いくばかり。息も苦しくなっていきます。
するとその時／
ニッキは、とつぜん青くかがやく光のうずに包まれていったのでした。そしてそれと同時に、急げきに意識を失っていきました。
でも／
いっぽう、池の外では、超フシギなことが起こっていたのです。それは、
「どうしようどうしよう？」
どうしたらいいか分からず、オロオロと走り回っていたリトル・ジョンが最初に気づきました。
バシュ〜〜〜／
青く光りかがやくかたまりが、ものすごい音を立てて池から飛び出てきたのです。そして、その光のかたまりは、
「ロ〜リング・アタ〜ック／」
そう叫ぶと、いきなりアントン・ベルーカに強れつなキックをおみまいしたのでした。
そこを、ちょうどワゴン車で通りかかったドクター・エッグマン、そしてオムレッツが目撃。そして、こう叫んでいたのでした。
「オオ／　ソニック・ザ・ヘッジホッグ／
（……だなや。）」

6月号につづく